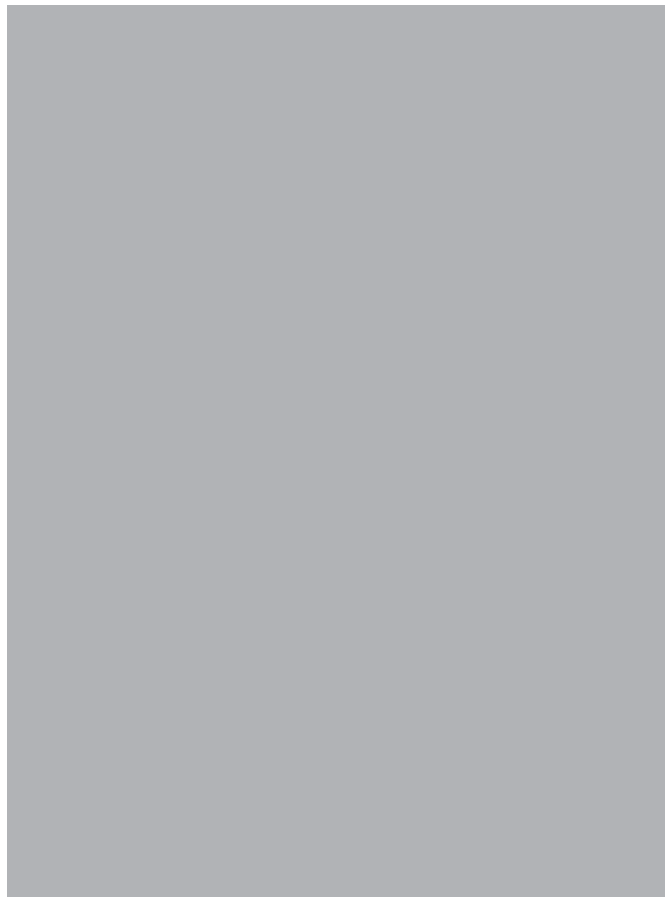


三代畠春斎
《流水文四方釜》



釜

の底から肩にかけて緩やかな膨らみに沿うように走る鋭い曲線。四つのうち対角の角二つを落とした肩の丸みと合わさり、形に緩急を生んでいます。落ち着いた鑄肌^{いばだ}にたった数本わずかな段差で表された線は、異なる水の流れが作る境界線のように互いを牽制しながら、しなやかに作品全体を引き締めています。

三代畠春斎(本名・弘政)は、富山県の高岡で代々釜を作る旧家に生まれました。父で金工家の二代畠春斎に師事して茶釜制作を習得、二〇〇九年に三代目を襲名しました。本作《流水文四方釜》は、現代という時代性を踏まえた、新しい茶釜の姿を模索する作者の代表作の一つで、二〇一三年第六〇回日本伝統工芸展にて、NHK会長賞を受賞しました。春斎は、「現代的」であるということを意識し、「形」を重視した表現で、作品を制作しています。

茶釜は、茶席で、風炉などとともに使用されるため、鑑賞者の目に茶釜だけが触れる機会はそれほど多くありません。しかし春斎は、茶釜だけを見た時にも破綻のない形を追求し、制作工程の中でも「形作り」に重点を置いています。およそ二〜三ヶ月の制作期間の内、八割を形作りに費やします。通常、茶釜の制作工程では、作品が完成するまで物の姿は見えないといわれています。それに対し、春斎の場合は、プロットを練り、小さな模型である程度の

形を固めた後、必ず実寸大の模型を作つて、数センチ数ミリ単位でシルエットを確認し、模型を何度も作り直して最終的な形の検討を重ねます。模様についても同様に、想像で付けることはせず、実寸大の模型で試します。ただ鉛筆で線を引き位置をとるだけでなく、金属になった立体の線を捉えるため、凹凸をつけて陰影を見ながら何度も引きなおしていきます。本作でも、形全体の鋭利さを和らげるため、制作初期には四つあった角を試作段階で二つそぎ落としています。上面に施された線も、様々な方法を試し、形が引き立つよう造形的要素の少ない線が選ばれています。さらに、形と模様という要素が埋没しないように鑄肌も調整し、細かい目によって静けさを感じられる仕上がりになっています。より実作品に近い条件での試作検討を繰り返す原型制作の工程によって、春斎は、頭に描くイメージのもつ曖昧さを極限まで突き詰めていくのです。

春斎は、自身が抱いたアイデアを一つの作品の中で、どこまで理想的な姿に昇華できるかが、鑄造^{ちゆうぞう}において重要であると、現代に生きる作家として、時代ごとに変化する美意識にどう応えていくかという課題に向き合っています。本作の醸し出す心地よい緊張感は、そうした制作姿勢の表れなのかもしれません。

(工芸課特定研究員 成田暢)

三代畠春斎(1976-) 《流水文四方釜》

2013年
鑄造・鉄
高さ16.0、径26.0cm
平成29年度寄贈
撮影:エス・アンド・ティ フォト